

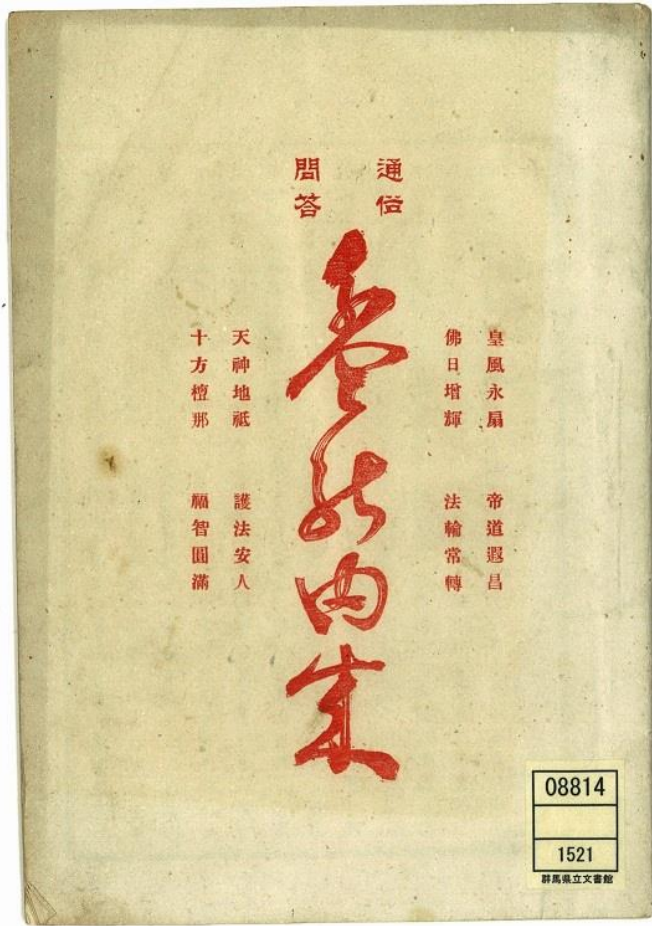
④ 『通俗問答』 盆の由来

明治26年(1893)7月1日

この史料は、明治時代の曹洞宗僧侶で、活発な教化活動を実践し、独自の信仰運動を展開した高田道見(1858~1922)が、勢多郡粕川村(現前橋市粕川町)龍光寺の住職であった時期に著した書物の一部です。展示した部分は、盆供台(盆棚)の荘厳について述べた部分です。文中に見られる「盂蘭盆会」(餓鬼道に堕ちた亡者への供養を行う仏教行事)と伝統的な先祖祭祀が融合し、日本における盆行事が形成されたと考えられています。

中島正家文書 P08814 No.1521

(前橋市大胡町)



08814

1521

群馬県立文書館

○第十二問答

○南無多寶如來、除慳貪業福智圓滿(赤色なり)  
 ○南無離怖畏如來、恐怖悉除離餓鬼趣(黑色なり)  
 ○南無廣博身如來、咽喉廣大飲食充飽(黃色なり)  
 右の如くにして、或は三寶を念じ、或は懺悔の文を唱へ、或は念佛し或は題目、或は盂蘭盆經を讀み、或は餘經神呪を誦するもよし、或は回向の文を讀むべし  
 此外目連尊者が亡母を救ひ玉ふ所の畫像を掛けて祭ることもあり、又荷葉の中に飲食及び美味珍物を盛りて備ふるもよし、そして後になりたらば、其供物等は地上又は水中に投ずべし、餓鬼は卑劣のものなるが故に、此の如き作法を行ふと雖も、我心に甘露の大施門開かざれば、畢竟勞して功なし、一心の施門開くるときは、法界の餓鬼の皆不飽滿して大歡喜を生ずべきこと疑ひなし、故に父母劬勞の大恩に報せむと欲するものは、必ず年々七月十五日に此法を修して怠るべからず  
 ◎問ふ、以上の如きは施餓鬼の作法の如くに思はる、敢て問ふ、施餓鬼と盂蘭盆と何程の差ひありや

○答ふ、有り盂蘭盆施餓鬼の法あり、それは別々出版することもあるべし、されども茲に聊かろの大概を示さむ  
 △盂蘭盆會畧式作法

先づ盆供臺を架すること長け三尺に過ぐべからず  
 壇の正面に佛像を安置し、其前に盂蘭盆經を置き、其前に香爐を置くべし、左右に飯食洗米菓物酒水花瓶、及び立花燈明、或は父母祖先の位牌等を列ぬるなり  
 而して東西南北中央に五如來の紙幡を立つべし、而して又鼠尾草(ミツハギ)を用ひて水を聖靈に洒ぐべし、或は梅枝を以て洒ぐも好し、其時唱ふることあり  
 今浴法水淨諸根、  
 八功德水當知是、  
 實相一味清淨水、  
 皆除一切煩惱垢、  
 次に五如來の書方は左の如し  
 ○南無妙色身如來、破醜陋形圓滿相好(青色なり)  
 ○南無甘露王如來、灌法身心令受快樂(白色なり)